

## 第三十一章 決戦

大平幹事長の出馬声明と同じ日に、中曽根総務会長、河本通産相もすでに出馬の意志を明らかにしていた。そこに福田首相の出馬が決まって、総裁公選はこの四者で争われることが確定的となり、事実上戦いの火蓋が切られた。

鈴木善幸を中心とする作戦担当者は、系列の国会議員、地方議員に檄を飛ばし、秘書団や個人後援会幹部を動員して、練りあげられた作戦に従ってただちに大平支持の工作活動に入った。これまで獲得した党員、党友の支持を固め、さまざまルートで調べあげた有権者に対して、大平支援の説得を行ったのである。

政策担当者は、大平が最後まで大福間の信義を重んじ、福田首相の求めに応じて、打ち出そうとしなかった基本政策の立案にとりかかった。政策は三つの柱にまとめられた。その第一は、大平が年来唱えてきた平和維持の考え方を「総合安全保障戦略」という形により具体化したものであり、第二は、政策の一貫性を重んじて、昭和四十七年総裁公選時にかかげた「田園都市建設」、第三は、生きがいのある社会づくりを目指すための「家庭基盤充実」の構想であった。あとは発表のタイミングである。大平は、十月二十六日、兵庫県知事選の応援途中に立ちよった京都市で「田園都市構想」を基本政策の目玉として打ち出し、二日後の二十八日の日本記者クラブの講演では「家庭基盤の充実」を発表した。

大福密約説については、十月三十日の日本テレビのインタビューで、大平は「政権の授受は私議すべきでなく、(福田さんとの)協力関係は無条件だった、と私も福田さんも心得ている。したがって、(大福密約といった)そうしたウワサは取

り上げる値打ちのないものと思つてゐる。たとえあつたとしても、それが守られなかつたからといつて、たいした問題ではない」と、もはや過去の行きがかりに何のこだわりもない態度で応じた。

十一月一日、いよいよ総裁公選予備選の告示の日である。届け出を終えた大平は、記者会見で、「自民党再生をかけたこの選挙を計画し準備してきた責任者の私が、今回立候補できたのは光栄であり、感無量でもあります。……互いにフェアな戦いをして党再生の活路を見出したい」とあいさつし、その後、青山墓地にねむる故池田、故吉田両元首相の墓参に赴いた。

午後一時からは、「大平正芳総裁候補擁立決起大会」である。ホテル・ニューオータニの会場の前には「香川県民の願望を突らせよう大平内閣」の横幕が張られて、地元後援会からも数百人が上京して人垣をつくり、続々と到着する人たちを拍手で迎えるなど、熱気をみなぎらせ、約七千の参加者で立錐の余地もなかつた。会は宮田輝参議院議員の司会で始まり、「大平正芳総裁候補推薦本部」を代表して鈴木善幸があいさつに立つたあと、田中派の長老西村英一が「わがこととして戦う決心をした」と強い支援の意を表した。また桜田武日経連会長は、「私は三千日か四千日たつたらあの世へ行く池田さんに会つて、大平さんはあんたより上だつたと言わせてください」と熱烈な激励の言葉をおくつた。

大平幹事長は、これに対して、「光栄あるチャンスを与えていただいたことに感謝する。全力をあげて闘いぬく」と謝辞を述べたが、もはや一切の迷いもこだわりも捨てた大平の闘志あふれる姿には、満場の息を呑むような気魄がこもつていた。

立候補の届け出締切りは四日である。抽選の結果、候補者の届け出順は、福田赳夫、中曽根康弘、河本敏夫、大平正芳となつた。党ではこの順で立候補に関する一切の発表を行うのである。一番を引き当てる福田派の田中龍夫は、「やった、やった」と涙を流さんばかりであつたが、逆に四番のクジを引いた大平派の田沢吉郎は一瞬青ざめて顔をひきつらせた。届け出の順番ひとつで悲喜こもこもの光景を現出するという高ぶつた雰囲気となつてゐた。

立候補届け出後の立候補者四人の記者会見で、大平は、中曽根、福田の二者の「有事立法推進論」に対して、「総合安全保障戦略」の立場から、「いまずぐ取り上げないと日本の安全が保てないとは思わない」と反論を行うとともに、憲法改

正問題についても、「国民の意思はそこまで熟していない」と改正論に反対の立場を明らかにした。大平は各社のインタビュー等で数日を費やしたのち、いよいよ全国の遊説にスタートした。

実はこの遊説の日程づくりが、容易ならぬ仕事であった。予備選が国会議員による本選挙のために二人の候補者を選出する制度であることはすでに述べたが、その方法として、「持点制度」というこれまでどの選挙でも経験のないやり方がとられることになっていたからである。

「持点」とは、各都道府県単位で、有権者千人当り一点の計算によりあたえられる点数のことである（千人未満は切上げ。例えば、有権者が五万九千六百六十四人いる北海道は持点六十点）。この持点を、選出された上位二人が得票の比例配分によつて獲得し、三位以下には点は配分されない。こうして各都道府県単位で計算された候補者別の持点を全国集計し、上位の二人が本選挙で争うという仕組みである。したがって、選挙戦略は、運動にあたって絶対的に一、二位を確保しなければならぬ重点府県と、見送る府県を見きわめるなど、綿密をきわめなければならぬ。そこが選挙参謀の頭の使いどころであった。大平陣営では、かねてから練りに練った戦略戦術によつて、大平幹事長の日程を作成し、地方遊説第一声は山梨県甲府市で行われることとなった。田中派ではあるが、福田首相に近い金丸信の地元をまず押さえておくためである。

大平幹事長は、「進め進めでは政治のやれない段階にきた。いままでの政策基調を大胆に直さなければならぬ。これまでの高度成長の量的拡大の時代から質的向上への大胆な転換をはかなければならない」と述べるとともに、「私は秀才でもないし、やり手でもない。しかし最後に、真実一路に、当り前の政治を勇氣をもってやりたい」と訴え、第一声を終えた。その日から選挙の終盤まで、大平は全国を駆けまわることになるが、その行程は一万八千キロ、直接に顔を合わせた有権者の数は五万人を超えた。

予備選がスタートした直後、大方のマスコミは、福田候補が一位、大平は二位だがその差は大差という予測であった。しかし、各議員が地元に戻り、実際に有権者に当たってみると、党員党友の多くは各候補の人物や政策を十分に見極めてか

ら自分の一票を行使しようとする慎重な態度であることがわかってきた。しかもその数は予想以上に多く、全有権者の半数近くに達すると推測された。この事実は、世論調査で福田側に大きく水をあけられていると見られていた大平陣営を勇気づけた。

これに対し福田側は圧倒的優勢の前評判を頼りに横綱相撲をとる構えであった。『世界の福田』、『全国の津々浦々から福田立つべし』という声が拳がっている。等と公言し、鮮やかな勝利を確信して、ムードに乗った戦術をとった。

運動が始まって十日余りすると、大平陣営の猛追が話題になり、福田、大平の一騎討ちの様相がますます鮮明になってきた。しかし、福田優勢の情勢はゆるぎもなかつた。中盤から終盤に至っても、ほとんどのマスコミは『福田優位』の予測を変えなかつた。こうした状況を背景に、福田陣営は、総持点千五百二十五点の中で、過半数の得点をするか、あるいは二位を百点以上離すかすれば、本選挙を行わず、一発で勝利できると判断し、県知事、県連幹部らを通じて有権者に『上から』猛烈な働きかけを行った。その目算は七百、八百点というところであった。

これに反して大平陣営は、『四百点確保』というきわめて低いところからスタートし、国会議員およびその秘書団、郷里の大平後援会会員らが全国に飛んで戸別訪問を行うという、いわば『下から』の戦術をとった。福田陣営とは対照的なやり方である。これまで大平を支えてきたあらゆる組織が動員された。文字どおり手弁当で、足に血豆をつくり、靴をはきつづすこれらの人々の手から口から、大平の人柄と政策は急速に有権者に浸透して行った。これらの地道な活動の成果は、大平候補が赴いた各地の演説会の熱烈な歓迎と激励となつてあらわれた。会場が改まることに大平は、聴衆の手こたえが確かなものになつて行くのを感じた。草の根を分けるようにして戸別訪問を行っている活動家たちにも、それは膚身で感じられる。運動にはいやましに力がこもってきた。

とりわけ、地元の香川県では、『讃岐ファイバー』とも言われる熱気が噴きあがり、友人、縁故をあげての運動が繰り広げられた。そればかりではなく、香川県の出身者は、その現住所のいかんを問わず大平支持に立ち上がり、とりわけ大平が弱いと見られた大栗田の東京、大阪など大都市での活動がみるみる強化された。小川平二の戸沢和人秘書（宏池会秘

書会長)、伊東正義の的野澄男秘書らの指導のもとに、秘書団が有権者の住所と名前だけを頼りに知らない街を一軒一軒、黨員をさがして歩く日が続いた。

これらの運動員は、立候補の所信を述べた「政治に複合力を」と題するパンフレットやリーフレットを携え、各個に黨員と思われる人々を戸別訪問し、朝早くから夜にいたるまで大平の支持を訴えて歩いた。間違えて対立候補の幹部の家をたずね、どやされたこともあったし、扉をビシャツと閉められることもあったが、多くは、お茶をすすめられたり、田舎の話や聞かせると言われたり、好意をもって迎えられることもあった。当時活動した人々は、異口同音に、「毎日が生き生きとしてやりがいがあった」と語っている。大平の知人の片岡勝太郎(アルプス電気社長)は、「総裁選に大平が金を使ったと非難する人々がいたが、そうではない。県民の盛り上がる熱意があったということを知らないだけである。」と記している(『回想録』追想編)

また、この予備選の仕組みによれば、自分の属する派閥の支持する候補者の票が自分の選挙区から何票出たかということが、そのままその議員の派閥に対する忠誠心の尺度と見られかねないので、ある議員の言うように、「自分の選挙よりも熱を入れざるをえなかった」という一面もあったのである。

一方、福田陣営は十一月八日には、福田首相が「予備選であさやかで明快な結論が出れば、本選挙でも尊重すべきだ」と、暗に大平が二位となった場合には本選挙への立候補を断念するよう示唆する牽制的な発言を行ったが、これに対して大平幹事長は、「選ばれた二人のうちどちらかが辞退しない限り、本選挙をせずに話合いで決める性質のものではなく、ルール通り淡々とやるべきだ」と反論した。

しかし、東京赤坂の短波放送ビルに陣取った大平候補選挙本部の総合判断は、「四百点」から「五百点」となり、中盤を過ぎると「六百点」に迫り、たとえ一位はとれなくても、福田首相との得点差はきわどく接近するものとの自信を持つにいたった。そうした射程に入った頃、大平は大平番記者にむかって、「本当に君らは大平が負けると思っか」と強気の発言をするようになった。

この頃までに、大平陣営は、本選挙に対しても十分な対策を練り、同調者を求める活動を行っていたが、本選挙で三木派が『草刈り場』となることを警戒した三木前首相は、十一月八日、札幌市で開かれた河本敏夫の政見発表会で講演し、二年前に『三木おろし』の母体となった拳党体制確立協議会（拳党協）について、「この権力構造の枠組をこわすことが党近代化の出発点である」として、福田、大平、田中の三派を強く批判した。これに対して大平は、翌日ただちに、「総裁選を通じて新しいリーダーのもとで新しい政治勢力が結集されるのであり、大福関係に傾斜した党運営が今後も続くという懸念は持たないでほしい」と否定した。本選挙は三木派の動向が一つの力ギ、との含みを持たせた答でもあった。福田首相がこの三木発言を「犬の遠ばえだ」と片づけ、三木の反発をみてあわてて「私も思いは同じ」と軌道修正したのとは対照的な大平の反応であった。こうして本選挙に向けての駆引きも、予備選と並行する形で活発に繰り広げられ、大平陣営は「本選挙に持ち込めば勝てる」との判断を次第に固めて行く。

有権者の郵送による投票は二十六日が締切りであり、投票は十二、三日ころがピークと見られたが、大平陣営の調査によると、実際にはその時点ではまだ五割七、八分しか投票が終わっていないことが判明した。これは、末端まで浸透するのに時間が欲しい大平側にとってはうれしい誤算であった。しかも、それらの人々は支持する候補者が前もって確定している有権者ではないことが推測される。この残票を獲得するためには、運動の手をゆるめてはならない。十七日頃までには選挙運動が事実上終了するだろうという戦略は急遽変更された。同志にはあと一週間、地元でふんばるようという指令が飛んだ。盟友田中角栄元首相からは、「二十日の段階でもまだ十%の投票が残っている。最後まで手を抜かぬよう」との助言とともに、自ら作成した全都道府県における四候補の予想得票分析等、詳細に調べた資料が届けられた。

下旬に入ると、北海道、埼玉、三重、長崎などわずかの道県でなお読み切れないものを残して、勝利が悪くても七百点前後で大接戦、という自信を持てるまでになった。劣勢とされた東京でも、大平、田中両派の秘書団が肩を組んで、じゅうたん作戦を展開し、その手こたえは十分であった。

大平陣営の予想外の追込みに危機感を覚えた福田首相は、十一月二十二日、都内のホテルで開かれた有志議員の懇談会

であいさつ、総裁公選の実態について、「当初の目的に反して、『物量作戦』が展開され、派閥が地方に拡散するなどの悪い面が出てきている」と述べ、名指しは避けたものの、大平、田中の両陣営を批判した。大平はただちにこれに対して、「党改革を推進すること、本選挙をルール通り実施することは、私がこれまで主張してきたことであり、福田さんがそういう考えになったのはいいことだ。汚れた選挙が心配だというが、それは福田さんなり私なりの候補者が、公正、清潔に選挙をやって行けばいいのではないか。他人ごとではないのだ。私の陣営が特に激しい物量作戦をやったとは思っていない」と強く反論した。もうこの頃には、大平は、「オレの動では、大して差は開かないぞ。ただし、勝てるかどうかはわからない」と余裕も示し始め、さすがに断定はしなかったものの、胸中密かに『勝利』の自信があることをうかがわせている。

開票の前日には、瀬田の私邸を激励に訪れた親しい人々に、「一点差でもいいから、何とかして一位になりたい」と意欲を示した。

一方、福田側は予備選での勝利は疑わなかったものの、大平の急追により、当初目標にした過半数はるか百点以上の差をつけた勝利も危うく、本選挙での対決が避け難くなったことを感じはじめていたらしい。二十三日の『読売新聞』には、本選挙対策として三福中連合が結成される動きが報じられた。

十一月二十七日、いよいよ開票の日がきた。大平は、いつもより少し早く午前六時に起床し、新聞がそろつまでの時間を読書に過ごした。記者に感想を聞かれ、「いつもと同じ心境だなあ。ぼくはだいたい鈍感なのかな。……要するに第一次試験だからな」と軽く受けとめ、票読みについては、「誰もわからないところがおもしろいんだよ。暗中模索するところに楽しみがあるんだ。それが神さまの英知じゃないのかな」と淡々と語った。

午前十時過ぎからは、各都道府県ごとにはじまった開票が進むにつれて、大平が予想以上に善戦していることが明らかになって行った。この開票は、全国の県連ごとに一斉に行われたが、開票の状況は普通の選挙と同じで、四人の候補者の数字がナマの得票数で宏池会の事務所に設けられた選挙本部に電話連絡されてくる。開票の関心は大平、福田の各県ごと

の得票比率であった。選挙戦の段階で各県ごとの大福の一位、二位の県や、その県における得票比率を計算して持点の予想配分を出していた宏池会選挙本部は、票が開きはじめた段階から両者の得票比率を計算して、最終予想の比率と対比して行く。それによって実際の得票が票読みを上回るかどうかが問題であった。最終の票読みによると、大平の得票は六百八十点から七百十程度となり、それに對し福田も七百点前後で両者ほぼ並んだと考えられ、悪くとも五十点以内の僅差に追い込んでいるという見方で一致していた。

青森、福島、大阪と最初の得票数字が入り、その比率が最終票読みの比率を上回っていることがわかると、宏池会の會長室に詰めかけていた大平、鈴木、斎藤邦吉、天野公義、佐々木義武といった十人ほどの幹部の間から「ほんとうか」という声があがった。開票室から運ばれる票には、予測を下回るものは一つもなかった。まだ百点前後の段階から宏池会の幹部たちの間には勝利の確信が見え、飛び交う声も明るくはずんできた。こうして順調に滑り出した開票の動向は時間が経過しても変わらず、十一時半頃になると開票終了の県が出はじめた。持点は予測を一点、二点と上回り、悪い県でも読み通りである。不安が拭いきれなかった東京、埼玉、北海道といった大票田でも、大平が二位に入ることが確実となってきた。

昼頃には幹部室の票読み班は、大平が一位となることを確信するにいたった。この頃になると足の踏み場もなくなった幹部室では、一県の持点が決まることに喚声があがる。それまで自分の事務所などでじっと成行きを見ていた議員が自分の県で予想以上に得点するのを見すまして本部に姿を現し、「結果が出るまで宏池会には顔を出せなかった」と、肩の荷を下ろした表情で喧噪の中に加わってくる。直通電話には、田中派の議員からも刻々とお祝いと喜びの電話がかかってくる。午後一時前、夕刊の見出しを聞きにくる新聞記者にも「大平、逆転の勢い」「大平優勢、一位確実」等、強気の見方を伝える。この頃には、大平が過半数を取れるかもしれないという見方さえ出てきた。こうして、開票が手間取った数県も最終持点が決まり、四時頃には全開票が終了した。

最終結果は、大平正芳七百四十八点（約五十五万票）、福田起夫六百三十八点（約四十七万票）、中曾根康弘九十三点



(約十九万八千票)、河本敏夫四十六点(約八万九千票)で、大平が福田に百十点の大差をつけての圧勝であった。大平氏が逆転首位」という各紙の号外が盛り場に舞った。

夕刻、続々と宏池会の事務所に戻ってきた同志たちは、予備選勝利という満足感にひたりながら、ホテルオークラの一室で大平幹事長を囲む夕食会を開いた。だが、まだ選挙は終わってわけではない。大きなステップは越えたものの、福田首相が本選挙に向けて、どんな反応を示すかわからない。浮かれた気分は皆無であった。大平自身も、終始けわしい表情を崩さず、「有権者の重い期待を感じている」と言葉少なに語っただけであった。大平は、六時四十分、ホテルオークラからそのまま私邸へ向かった。

そのころ福田陣営は首相の進退をめぐる混戦の中にあつた。官邸の執務室にとじこもった福田首相のもとには、大勢の判明した四時過ぎから派内の幹部、若手が続々とつめかけ、中川一郎ら強硬グループは、「あくまで本選挙に突入せよ」と主張し、塩川正十郎らは「本選挙を辞退(退陣)すべきだ」と反論、三時間以上に及ぶ激論が続いていた。午後七時半、福田はついに肚を固め、執務室から姿を現して、記者会見のため党本部に向かった。

「あの結果をみて率直に言っ**て**びっくりした。私はかねてから予備選挙の結果を尊重すると言ってきた。つまり、本選挙には立候補しないという決意だ。(中略)まア、天の声も変な声もたまにはあると思う。きょうは敗軍の将、兵を語らずだ……」

これが福田首相の退陣表明であった。この瞬間、大平正芳の自由民主党総裁は事実上決定した。本来ならば勝利の叫びのあがるころであった。が、宏池会事務所のテレビでこの記者会見を見ていた同志たちは、会見する首相の表情があまりにも苦渋に満ち、こわばっていたので、誰一人声を発しなかった。勝利にもかかわらず重苦しい沈黙が一瞬、室内を支配した。

記者団の要請で急遽、大平「新総裁」に事務所に戻るよう連絡が飛び、大平は折返し事務所に戻ってきた。いくつものテレビのライトが照りつけるこ**う**返した宏池会の会議室で、大平の記者会見がはじまった。

「先ほど福田総理の記者会見を拝聴しました。あのような決断（本選挙辞退）をされたことに、あらためて敬意を表します。予備選挙中に総理が言われていたことを実行された点、戦う力を十分に持ちながら、党内に必要以上の混乱を招かないように、という愛党の精神から出たものと思ひ、深い敬意を表します。この気持を今後の党運営に生かしていくつもりです。」

大平はこう述べたあと記者団の質問に答え、「（大平政権の基本は）党内の融和を第一としなければならない。内外とも大変な時局なので、党が一致結束して当る必要がある。（私は）その先頭に立たなければならぬと思う。新政治勢力の結集について具体的なことは考え及んでいないが、党内の人材には出来るだけ働いてもらうよう、偏頗な党運営はしてはならないと思う。清新で強力な体制を整えるのは当然の任務である」と述べた。つづいて、「一瞬に意味がある時もあるし、十年、二十年に実のない時間もある。歴史というのは奇妙なものだ」と語った大平の顔は厳肅そのもので、一語一語を選び、苦汁を噛みしめているような勝利の会見であった。

大平が予備選で大差で勝利という結果は、多くのマスコミの予測を完全に裏切るものであり、そのために勝因が、田中派の物量作戦による支援とするものが少なくなかった。たしかに田中派は、わがごとくのように「大平のために闘った。これなくしては、大差での勝利は実現しなかったであろう。しかし、最大の勝因は、大平が、田中派も含めて、全部隊の活動エネルギーを爆発的に噴出させたことにあった。」

田中角栄は、「長い交友の中で、大平君が一点の迷いも逡巡もなかったのは、後にも先にもあの時だった」と述懐している。

この夜、大平邸には三々五々、同志が集まってきた。しかし、大平を囲む室内には先ほどの重々しい空気がみなぎり、笑いも喜びも遠慮がちであった。あれだけ望んで戦い、勝った結果がむなしくさえ感じられた。

予備選から二日後の二十九日、大平幹事長は八日ぶりに党本部に帰った。大平の入る部屋はもはや幹事長室ではなく、党総裁室である。各マスコミのインタビュアー、臨時党大会での総裁あいさつの起草等々、新総裁としての過密スケジュールが待っている。それらをこなして十二月一日には第三十五回臨時党大会が日比谷公会堂で開かれた。福田一選管委員長から「予備選開票の結果、大平正芳、福田起夫両氏を『総裁候補』に決定、福田氏から『総裁決定選挙（本選挙）』に立候補を辞退す」旨文書で申し出があり、選管がこれを了承したこと、したがって新総裁候補には大平氏一人になった」と報告があり、根本能太郎議長がこれを大会にはかつて、全員異議なくこれを了承した。

大平新総裁のあいさつは次のとおりである。

「ただいま、私は本大会の名において自民党総裁に選任されました。誠に身に余る光栄であり感激であります。

まず私は福田前総裁が総裁として、日夜わが党の再建につくされた貢献に心から感謝申し上げます。またこのたび総裁公選において、党の融和と結束のため、自ら候補を辞退された勇断に対し、満腔の敬意を表します。

わが党にとって、現在最も大切なことは、党内の融和と結束をはかることであり、これまで不和と違和感、こたわりがあつたとするならば、これを一掃し、相互信頼の上に立つて、全党が一致結束して党勢の伸長に努めなければなりません。

私は全党的な立場に立つて、公正にして明朗な党運営をはかるとともに、既に手を染めた党改革を推し進め、清潔にして活力ある党再生を期する決意であります。諸君の一層の支援と鞭撻をお願い申し上げます。」

「大福が総裁公選で争うようなことになれば、党は大変なことになる」とは、福田も言い、大平も口にしたことであつた。その戦いが行われてしまつたいま、大平にとって、何よりも緊要なのは、党内の融和を取り戻すことである。だが、争いの重いしこりは、大平総裁誕生の当初からその瘴気を噴きだしたのである。

首班指名の日取りは十二月六日と決まり、大平総裁は、新政権の人事にとりかかった。大平の構想は、その骨格となる

党三役を重厚なものとし、内閣の閣僚に新人を多数抜擢して清新なものとするのであった。まず、幹事長には、多年「大平の片腕」として手腕を発揮し、大平が閣僚として重責を果たしている間はつねに党にあって側面から助け、宏池会の世話役も果たしてきた鈴木善幸を起用する肚であった。だが、福田派を中心に三木、中曽根両派、すなわち、総裁選に敗れた三候補の派閥は、鈴木幹事長案には、「三木内閣発足当時の、『総裁派閥から幹事長は出さない』との申合せに反する」という理由で反対した。

すでに大平は事実上「総裁」に決まった十一月二十八日と首班指名を直前にした十二月五日に、それぞれ福田を訪ねて会談し、入念な事前調整を行い、福田は大平体制への協力も約束して「党の円満な運営と結束」で合意にも達していたのである。福田派内から流れる「総裁派閥からの幹事長起用」批判論についても、「福田政権発足（大福体制）時は、私の方から何も条件を出さなかった。福田氏も（今度は私に）協力してくれるはず」と信じてやまなかった大平としては、福田自身が党の混乱を増大するような行動をとると思ってもよらぬことであった。一方、福田側としては、大福協力体制を継続するのなら、党運営には福田の意向を尊重すべきだという主張があったのであろう。

福田派内からは鈴木幹事長反対論が急進化し、「幹事長を大平派から起用するなら国会での首班指名投票は白紙で臨む」という強硬論を抑えきれない事態になって行った。福田派の若手は、「（新生福田派は）党改革の戦闘集団となる。その意思表示は首班指名だ」と、揺さぶりの目標を「鈴木善幸幹事長阻止」の一点に絞ったとも言えた。

政治の空白を避けるために、目をつぶらねばならぬところはつぶらうと決意した大平総裁は、十二月五日夜、私邸に鈴木を招いて收拾策を話し合い、急遽、幹事長に同じ宏池会の斎藤邦吉を起用する考えを示した。鈴木も大平の気持を理解し、その提案を了承して、私邸に引き揚げて行った。大平は直ちに私邸から福田に電話でこの旨を伝えた。

福田が「斎藤幹事長」を了承したにもかかわらず、福田派それに中曽根派も加わって、「大平派の幹事長を引っ込めない限り、衆院本会議出席は拒否」だと、なおも混乱は続き、党内がまとまらないため、六日に予定されていた首班指名の衆議院本会議は、異例にもついに流れてしまった。

この夜、福田派の渡海元三郎、加藤六月が大平を私邸に訪ねてきた。斎藤幹事長は「暫定」にできないか、あるいは三役にしても幹事長からはさせないか、とわざわざ打診にきたのである。大平は「そんなことはできない」とこれを拒否した。七日午前八時、大平は詰めかけた記者団に「野沢（福田の私邸）に行ってくる。またすぐ帰ってきて報告するから」と言い残して福田邸に向かった。「福田さんは協力すると言っていた。中曾根派には福田さんから話すことになった」、会談を終えて私邸に戻った大平はようやく肩の荷を下ろした表情であった。「総裁派閥から幹事長を出すことは今回限りの暫定的なものとする」との合意が両者の間で成立したのである。さしもの福田派も、福田の説得で鋒を収め、七日夕刻、やっと首班指名にこぎつけた。

重い勝利のあとの重いスタートであった。